

— 1 —
次の文章は福田恒存「悪に耐える思想」の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

【A】言語道具説ということをよく申します。言葉は道具なのだ、道具だからお互の間に通じなければならない。同時に、通じさえすればどうでもよいという考え方です。表音主義者たちははつきり自分でそう申しており、言葉が何か、^(a)「シンピ」的なもののように考えるのは間違いだと申しています。他方^①表音主義者に反対の人達は「言葉を道具とは何事だ」と申します。ところが私は言語道具説で結構だと思うのです。言葉によつてしか、ものを考えられないのだから、言葉は考える道具で差し支えない。問題は道具ということの解釈の仕方にあるのではないか。私が言葉は道具だという時と、^(b)「アンチヨク」にもものを考える人がそういう時とは、同じ道具という言葉は使いますが、その道具ということに対しての考え方が本質的に違うのです。

普通「人間を道具に使うのか」という時、それは何となく生きていないもの、死物という風に考える。あるいは精神ではなく、物質という風に考える。「道具扱いをする」というと軽蔑の意味がある。しかし私は道具というものをそういうようには考えていません。道具というものは物と心が出会う場所であるというように考えています。道具と一口にいっても、それは単なる物にすぎないのか、すなわちそれを使う人間から離れて存在し得るものなのか、それともずっと人間に密着したものであるか、そのことをよく考えてみなければならないと思います。このことは職人が如何に道具を大切にするかを見ればよくわかります。これは私の子どもの時の経験ですが、私の家で普請をやつて大工が鋸だの鉋だのを持って参りました。職人が食事に行っている時、私はこつそりそれらの道具を使つてみたのです。ところが職人が帰つて来るとそれが^②すぐ見つかつてしまいました。自分の手慣れた道具を、素人の子供が使えばどこかに狂いが生じる、それは職人たちが自分でそれを使つてみるとすぐにわかるのです。何も^(c)左甚五郎のような名人ではなくても、大工で飯を食っている人間なら必ずわかる筈です。それらの道具は、その機能を最もよく発揮できる状態にあった。しかし素人の私が使つたために狂いが生じたのです。すなわちその鋸がどのように使われれば最も機能的に働くかということは、その持主である大工さんが一番よく知っているし、その大工さんが使うのに一番いい状態にある事が最も機

能的であるといえるわけです。ところが私がそれを扱つたために、その最良の状態がこわされてしまったわけです。これは例えば万年筆だとか、何か割合身についた道具を考えていただければおわかりだと思います。

よく道具というと手足の延長であると言われますが、実を言えば手足もまた道具なのです。その人の生理あるいは心理というものにびつたり密着して機能的に動いている道具なのです。道具というものは決して単なる物質、物ではない。すなわち物ではあつても、必ず主体である私たちの精神とか心とかいうものの癖を受けているものなのです。いかなる物も必ず私たちの心がそこにしび込んでいます。万年筆の例でもおわかりのように、物というものは必ずそれを使う人の手癖になじんでいる。あらゆる物がその人の生き方を内に含んでいるのです。だから物といつて軽蔑するのは間違いなので、道具にしる物にしる、それはすべて心を離れては存在しない。心そのものである。あるいは心と物とが、物質と精神が出会う場所である。道具というものはこのように考えるべきだと思います。【A】ここまで

【B】そういう前提で考えて見れば、言語道具説というのは決して悪いことではない。言葉というものは、言葉という客観的な存在と、私たちの心が出会う場所という意味での道具なのであります。しかしわれわれがうつかり、鋸というものが私たちから離れて存在するものであり、Aの大工によつても、Bの大工によつても同じ効果を発揮するものだと考え勝ちであるように、言葉もとかくそれを使う人から離れた客観的な意味をもっていると思ひ勝ちなのです。しかしこれが大きな間違いであつて、マイクロフォンとか、コップとか、それを使う人の個人差が少なく、独立に存在し得る要素の強い言葉もありますが、言葉によつてはむしろ主観的な要素を非常に強くもっているのです。

早い話が今の道具という言葉が良い例で、それを死物と解している人もあり、生き物と解している人もあるというわけです。またたとえば身近な例をとつて、母親だとかあるいは恋人だとかいう言葉を考えて見ればわかります。一体母親というのは万人にとつて共通の存在であるか。たしかに、自分を生んでくれた女という共通な意味はもっております。ところがわれわれは母という言葉を決してそういう動物的な意味で使っているわけではなくて、個人個人によつて起る

A

差

B

別のイメージ

をそれにこめて使っているのです。生れた時から母親の顔を見ない人が母という言葉を使う場合と、いつくしみ深い母親に育てられた人が母という言葉を使う場合とは、その言葉にこめられた内容は全く違って来るわけです、その他、恋だとか愛だとかいう言葉も同様で、それらの言葉を皆一様に使ってはありますが、その場合使う人によって意味している内容は一人一人違うわけです。それに気がつかないで「愛」という言葉には何か客観的な共通な意味があるものだときめてかかって安心している。ところがしばらくたってその違いがやっとわかってくる。その時になって「あなたは私をだました」というようなことになるのですが、だましたのは実は相手ではなく、「愛」という言葉は共通なものだと思いきんだこちらの^(c) サツカクから来ているわけです。このようにみんなが自分がいまいように、言葉を自分の道具として使っているのです。今述べたように鋸や愛や母親や、その他あらゆる言葉がその人個人の言葉となってしまうている。すなわちそれは国語というよりもその人の個人語なのです。だから同じ言葉を使っているながら、^③ 皆が外国語をしゃべり合っているようなものです。本当の外国語ならわからないからはずきりしてお互に誤解は生じない。ところが何か同じ国語をしゃべっていると、すっかり同じ言葉を使っているように思いこんで、そこに混乱がおこるのです。

それですまず第一に言葉というものは、客観的なものではない、というよりも自分の生命そのものであるということをはっきり腹に入れて貰いたいと思います。【B】ここまで

(注) 左甚五郎……江戸時代の伝説的な大工、彫刻師。

問一 〓部(a) 〓部(c) のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄

A

B

に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問三 〓部①「表音主義者に反対の人達」とあるが、彼らと筆者の考え方の違いを、【A】の部分の内容をふまえて説明しなさい。

問四 〓部②「すぐ見つかってしまいました」とあるが、それはなぜか。説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 素人の子供が職人の道具を使えば、道具に狂いが生じてしまうということは、左甚五郎のような名人でなくとも、職人であれば誰でも知っている理屈であるから。

イ 素人の子供は、道具に狂いが生じたことを問題視しなかったが、長年道具を使ってきた職人は、道具と一体化しており、道具の狂いを許し難く感じたから。

ウ 職人の道具がどのように使われれば機能的に働くのかということとは、職人自身が最もよく知っており、素人の子供に理解できることではないと、職人は分かっていたから。

エ 職人の精神との関わりの中で機能的に動いている道具に、関係のない他人が介入することで、道具の機能的性が損なわれてしまったことを、職人は鋭く察知したから。

オ 素人の子供が職人の道具を使ったことで、職人の心が道具を支配できなくなってしまったことを、道具を使ってみた職人が、強く実感したから。

問五 〓部③「皆が外国語をしゃべり合っている」とあるが、それはどういう様子を表現したものか。【B】の部分の内容をふまえて説明しなさい。

問六 本文全体の内容を説明したものとして、最も適当なものを選びなさい。

ア 道具というものを、人生と無関係なものだと誤解してしまうことが混乱の種であるように、使用者の人生と密接な関係を持つ言葉を、万人共通のものだと誤解してしまうことは、混乱を生み出し、人間関係を悪化させかねない。このような混乱を避けるために、言葉の主観性を自覚しつつ、相手が理解できるように話すべきだ。

イ 人間の心そのものである道具を、単なる物質とみなして軽蔑する態度は、使用者の心そのものである言葉を、単なる物質として軽蔑する態度をも生み出し、世界に混乱をもたらしてしまった。このような混乱を收拾するための第一歩として、言葉が客観的なものであるという考え方をやめ、言葉の主観性を見直すべきだ。

ウ きわめて主観的なものである言語というものを、客観的なものであると勘違いしがちであることは、使用者の人生そのものである道具を、使用者から離れた単なる物質だと思いこみ、道具の本質を取り違えがちであることと通じ合う。このような言葉に対する勘違いは、混乱のもとであるから、避けなければならない。

エ 人間が道具の支配者となるために、道具から人間の心を排除しなければならないのと同じように、人間が言葉の支配者となるためには、言葉から人間の心を排除しなければならない。人間がもう一度、道具や言葉の支配者となるための第一歩として、全ての言葉を、使用者の個性に左右されない客観的なものとするべきだ。

オ 道具を機能的に使うためには、人間の心が道具を支配している状態を維持しなければならないように、言葉を機能的に使うためには、人間の心が言葉を支配している状態を維持しなければならない。人間が道具の支配者となり続けてゆくためにも、人間の言葉が客観的なものではなく、主観的なものだと理解するべきだ。

〈このページは白紙です。〉

二

次の文章は夏目漱石「こころ」の一節である。語り手である「私」は東京の学生である。「私」は「先生」という世間を捨てて、仕事にもつかず、奥さんと静かな生活を送る人物と偶然出会い、心ひかれていく。以下の場面は「私」の父親が危篤状態になり、大学の卒業をひかえている「私」が地方の実家に帰った場面である。実家には「私」の「兄」や「妹」も帰ってきている。また、「私」の「母」は「私」の「父」を安心させるために、「私」に早く就職をしてほしいと願っている。そんな「母」の要望を受けて、「私」は、就職の世話を依頼する手紙を、実家から「先生」に差し出したところである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

父の病気は最後の一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するようになつた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床にはいつた。

父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつた。用心のために、誰か一人ぐらいつつ代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行ってみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に腕を曲げて枕としたなり寝入つていた。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしてゐた。私は忍び

A

でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。

「関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」

関

「しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」

「困つても仕方がない。外の事と違ふからな」

兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は子として親の死ぬのを待つてゐるようなものであつた。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚つた。そうしてお互いにお互いがどんな事を思つてゐるかをよく理解し合つてゐた。

「お父さんは、まだ治る氣でゐるようだな」と兄が私にいつた。

實際兄のいう通りに見えるところでもないではなかつた。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うといつて、^(b)シヨウチしなかつた。会えばきつと、^(注)私の卒業祝いに呼ぶ事ができなかつたのを残念がつた。その代り自分の病氣が治つたらというような事も時々付け加えた。

「お前の卒業祝いは已めになつて結構だ。おれの時には弱つたからね」と兄は私の記憶を突ツつた。私はアルコールに煽られたその時の乱雑な有様を想ひ出して苦笑した。飲むものや食うものを強いて廻る父の態度も、にがにがしく私の眼に映つた。

私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかつた。小さいうちは好く喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へはいつてからの専門の相違も、全く性格の相違から出てゐた。大学にゐる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、⁽¹⁾常に動物的だと思つてゐた。私は長く兄に会わなかつたので、また懸け隔たつた遠くにいたので、時からいつても距離からいつても、兄はいつでも私には近くなかつたのである。それでも久しぶりにこう落ち合つてみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になつてゐた。二人に共通な父、その父の死のうとしてゐる枕元で、兄と私は握手したのであつた。

「お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違つた質問を兄に掛けた。

「一家の財産はどうなつてゐるんだらう」

「おれは知らない。お父さんはまだ何ともいわないから。しかし財産つていつたところでは高の知れたものだらう」

母はまた母で先生の返事の来るのを苦にしてゐた。

「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

「先生先生というのは一体誰の事だい」と兄が聞いた。

「こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は^(注2) 必竟^{ひつきよう}聞いても解らないというのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解してもらう必要はなかった。けれども腹は立った。また例の⁽²⁾ 兄らしい所が出て来たと思った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察していた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何もできないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰らん人間に限るといった風の^(注3) 口吻^{こうふん}を洩らした。

「イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着な^(注4) 了簡^{りようけん}だからね。人は自分のもっている才能をできるだけ働かせなくっちゃ嘘だ」

私は兄に向かって、自分の使っている⁽³⁾ イゴイストという言葉の意味がよく解るかと思き返してやりたかった。

「それでもその人のお蔭^{かげ}で地位ができればまあ結構だ。お父さんも喜んでるようじゃないか」

兄は後からこんな事をいった。先生から明瞭^{めいりよう}な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事もできず、またそう口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑^{さうどん}み込みでみんなにそう吹聴^{ふいせう}してしまった今となってみると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなった。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の

B

の事が書いてあればいいがと念じた。私は死に瀕^{ひん}している父の手前、その父に幾分^{いくぶん}でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父^{おじ}だの叔母^{おば}だのの手前、私のちつとも^(注5) 頓着^{とんじやく}していない事に、神経を悩まさなければならなかった。

父が変な黄色いものも嘔^はいた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くなるはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」といった。それは医者が帰り際に兄に向っていった事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。

「お前ここへ帰って来て、宅^{うち}の事を監理^{かんり}する気はないか」と兄が私を顧^{かへり}みた。私は何とも答えなかった。

「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまたいった。兄は私を土^にの臭^{にお}いを嗅^かいで朽^くちて行っても惜しくないように見ていた。

「本を読むだけなら、田舎でも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好^いいだろう」

「兄さんが帰って来るのが順ですね」と私がいった。

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一口に斥^{しりぞ}けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充^みち満ちていた。

「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」

「お母さんがここを動かか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合った。

父は時々嚙^{くは}語^ごをいうようになった。

「^{注6} 乃木大将に濟まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」

こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋^{さび}しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻^{まわ}して母の影が見えないと、父は必ず「お光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起^たって母を呼びに行った。「何かご用ですか」と、母が仕掛けた用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰^{みつ}めるだけで何もいわない事があった。そうかと思うと、まるで懸^かけ離れた話をした。突然「お光お前にも色々世話になったね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきつと涙ぐんだ。そうした後ではまたきつと丈夫であった昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。

「あんな憐^{あわ}れっぽい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷^{ひど}かったんだよ」

母は父のために箒^{ほうき}で背中を^{注7}どやされた時の事などを話した。今まで何遍^{なんべん}もそれを聞かされた私と兄は、いつもとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念^{かたみ}のように耳へ受け入れた。

※出題の都合上、一部表記を改めた。

(注1) 私の卒業祝い……実家で「私」の卒業祝いが行われる予定だったが、明治天皇がお亡くなりになったため、卒業祝いは中止になった。

(注2) 必竟……結局

(注3) 口吻を洩^もらした……口ぶりだった

(注4) 了簡……考え

(注5) 頓着^{とんちやく}していない……無関心な

(注6) 乃木大将……陸軍大将の乃木希典^{のぎれすけ}のこと。明治天皇が亡くなったときに、自殺した。

(注7) どやされた……なぐられた

問一 〓部(a)(b)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 空欄

A

B

には、それぞれ体の一部を指す漢字一字が入る。空欄に入る漢字をそれぞれ答えなさい。

問三 〓部①「常に動物的だと思っていた」とあるが、ここには「私」の「兄」に対するどのような気持ちが表れているのか。説明として最も適当なものを選びなさい。

ア「先生」と違って、自分の仕事に対して熱心に取り組んでいる、活動的な「兄」のことを尊敬する気持ち。

イ「先生」と違って、世の中のために役に立っている、力にみちあふれた「兄」のことを評価する気持ち。

ウ「先生」と違って、優しい気持ちをあまり持たない、野蛮な「兄」のことを嫌い、否定する気持ち。

エ「先生」と違って、他人を攻撃ばかりしている、暴力的な「兄」のことを嫌いつつも、うらやむ気持ち。

オ「先生」と違って、自分の社会的活動のことばかり考えている「兄」に違和感を覚え、批判する気持ち。

問四 — 部②「兄らしい所」とあるが、「私」はどのようなところに「兄らしい所」を感じているのか。説明として最も適切なものを選びなさい。

ア 努力して自分の才能を生かせる人間だけに意味があるという自分の価値観が全てだと思いこみ、その価値観に合わない人間は理解しようとしないうところ。

イ 社会的な地位のない人間には価値がないという考え方にとらわれ、社会的な地位がないために遊ぶしかないでいる「私」や「先生」のことを、否定するところ。

ウ 著名人にならなければ人生に意味はないという価値観を持ち、社会的地位を求めない「私」にも、自分の価値観を押しつけ、「私」を変えようとするところ。

エ 人の話を全く聞いていなかったにもかかわらず、まるで話を聞いていたようなふりをして、更に「私」を否定することで、自分の過失をやむやみにするところ。

オ 自分で質問しておきながら、「私」の説明を忘れてしまっただけでなく、「私」の価値観を改めさせようとして、わけの分からない説教をしていくところ。

問五 — 部③「イゴイスト」とは、「自分のことしか考えない人」という意味の言葉であり、——部③よりも後ろの部分には、「兄」の「イゴイスト」ぶりが表れていると考えられるところがある。具体的には、「兄」のどのような様子を通じて、「兄」の「イゴイスト」ぶりを示そうとしていると考えられるか。——部③よりも後ろの部分の内容から説明しなさい。

問六 本文全体の内容を説明したものとして、最も適当なものを選びなさい。

ア 性格や価値観の違いもあって、「私」と「兄」は常に反発し合ってきた。「兄」も「私」も父親のことを嫌っており、「父」の生前から「父」の財産をめぐる争ってみたい、「父」の酒癖の悪さを馬鹿にしてみたり、兄弟ともに、実子とは思えないほど「父」のことを軽視しているような部分があったが、「父」が元気だったときのことをなつかしそくに話す「母」を前にしたときは、さすがに両者ともに、「父」の死について考えざるをえなくなり、悲しい気持ちにとらわれてしまった。

イ 「私」と「兄」の間に兄弟の情はあったものの、性格や考え方の違いもあって「私」は「兄」に対して反発する部分が強かった。「兄」も「私」も「父」の行動を嫌う面を持っていたり、「父」の生前から、「父」の死後のことをめぐって議論したり、兄弟ともに「父」自体をないがしろにしているような部分があったが、今や弱気になってしまった「父」の、まだ元気だったときのことを母が話したときは、兄弟ともに、「父」のことを考えながら、神妙に耳を傾けた。

ウ 性格や思想の違いから「私」と「兄」の関係は、必ずしもうまくいっていたわけではないが、両者の間に肉親の情がわくこともあった。「兄」が「父」や「母」に対する思いやりを欠くのに対して、「私」は「父」に反発しつつも、「父」のことを心配し続けるなど、兄弟の「父」を思う気持ちにはずれがあったが、すっかり衰弱して「母」に感謝の言葉を述べる姿とは異なる、父の昔の姿を「母」が語ったときは、さすがに「兄」もまた「父」の最期を思いつつ、真剣に話を聞いた。

エ 過去の様々な出来事から、「私」と「兄」の間には深い溝ができていたが、兄弟の間に愛情が無かったわけではない。「父」の思いをくみとって、「私」の出世を願う「兄」に対して、「私」は「父」への反発から、社会に出たくないと考えているなど、兄弟の「父」に対する思いは大きく異なるものであったが、涙ながらに、過去の元気だった頃の「父」のことを語る母親を前にしたときには、「私」もさすがに「父」の死を強く実感し、深い悲しみにとらわれてしまった。

オ 「父」の死後のことや、人生についての価値観をめぐる言い争う中で、「兄」と「私」の間にあった溝は、ますます深まってしまった。「兄」も「私」も育ててくれた「父」に対する感謝を忘れず、「父」の回復を願い続けてきたため、病床で「母」に対して優しい言葉をかける、すっかり弱ってしまった「父」の姿を見たり、元気だった頃の「父」のことを懐かしそうに語る母の話を聞いたりする中で、「父」の死が間近に迫ってきたことが分かったと、途方にくれてしまった。

問七 次の中から、夏目漱石の作品ではないものを、二つ選びなさい。

- | | | | | |
|---------|-----------|-------|-------|--------|
| ア 坊つちやん | イ 吾輩は猫である | ウ 夢十夜 | エ 門 | オ それから |
| カ 三四郎 | キ 羅生門 | ク 明暗 | ケ 高瀬舟 | コ 彼岸過迄 |

問七

